

# 「真実の神話」としてのキリスト教 —C. S. ルイス「神話は事実になった」から<sup>(1)</sup>—

岡田 理香  
OKADA, Rika

## 目次

序

1. 「神話は事実になった」—神話群の機能
2. キリストの物語のみが事実
3. ルイスの書いた神話  
—「神話」としてキリスト教を見る重要性  
おわりに

## 序

「神話」という言葉ほど多義的に用いられる言葉も稀である。ギリシア神話など過去の物語を指すこともあれば、「安全神話の崩壊」など人々の間で通用していたものを示すこともある。また2015年には「スター・ウォーズ」第7作目が公開されたが、この作品もまた「現代の神話」と呼ばれている<sup>(2)</sup>。

この「スター・ウォーズ」制作のヒントの一つとなったのは、J. キャンベルの『神話の力』であった<sup>(3)</sup>。キャンベルはB. モイヤースと神話研究に尽力していたが、モイヤースの同僚は「なぜ神話が必要なのか」「あんなギリシアの神々だのなんだの<sup>(4)</sup>」と言われたという。このようにある場所では「神話」という語は軽んじられる傾向にあり、その一方で「神話」は重要視され研究対象となることもある。だがこの場合の「神話」とはたいていキリスト教以外の異教の神々の物語とされることが多い。

キャンベルは、キリスト教についての知識を前もって得ていたが、キリストが他の神話群の神々と類似していることを見出すと、キリストについての物語を他の神話群と同じレベルに貶めたように見える。それは、神話群が時代的に先に現われてその後キリストが登場したと、時系列に着目しているためである<sup>(5)</sup>。確かに聖書以前に聖書と類似した物語がすでに存在していたことを知ると、聖書も神話群の一つと見なされることもあるだろう。その中であらゆる神話群の比較を行なうあまり、キリスト教の独自性を見失うことも予想される。

モイヤースの同僚に見られるように、「神話」が過去のものに見なされて軽んじられる傾向にあることは否めない。たとえ「神話」が重きを置かれて研究対象にされたとしても、それはキリスト教以外のもの（多くの場合は他の宗教）として捉えられることがほとんどである。こうしてキリスト教と「神話」とは切り離されて考えられてきた。その主張の一つが R. ブルトマン (Rudolf Bultmann, 1884-1976) による非神話化 (Entmythologisierung / demythologization) であろう。彼は「新約聖書の宣教にその妥当性を保持せしめようとするならば、これを非神話化する以外にはなんらの道はない<sup>(6)</sup>」と述べている。

これに対し、キリスト教にあえて「神話」を認めることで、福音書をより深く理解できるとの主張がある。その一つが『ナルニア国年代記 (The Chronicles of Narnia)』(1950-1956) などの著作で知られる C. S. ルイス (Clive Staples Lewis, 1898-1963) のエッセイ「神話は事実になった (Myth Became Fact)」(1944) である。

これまでルイスの「神話」に関する研究は、ブルトマン批判と一体化する形で為されてきた。たとえば A. マクグラス (Alister McGrath, 1953-) は、ブルトマンによる非神話化を「キリスト教から神話を剥ぎ取るもの」と理解した上で、神話の重要性に着目したルイスを擁護し論を進めている<sup>(7)</sup>。P. H. プレイザーは、ルイスが「受肉し死んでよみがえる神々の神話という伝統的な形式」を「神が用いた」と理解したと見なしている<sup>(8)</sup>。また「神話」というカテゴリーからは外れるが、本多峰子はブルトマンの

説を「奇跡を非科学的として退ける態度<sup>(9)</sup>」と見なし、ルイスの『奇跡論(Miracles)』(1947)を用いて奇跡の起こりえる可能性を示唆した。

このようにルイス研究の枠組みにおいて、ルイスの「神話」への取り組みは非神話化とは対比的に扱われてきた。だがルイスのいう「神話」の持つ機能や、「神話」としての福音書理解について問うことはあまりされていない。

ルイスは17歳の時、「キリストもロキも同じだ」「宗教とは全て神話が発展したものに過ぎない<sup>(10)</sup>」とA. グリーヴス(Arthur Greeves, 1895-1966)宛の書簡に残している。だが32歳の時にJ. R. R. トールキン(John Ronald Reuel Tolkien, 1892-1973)とH. ダイソン(Hugo Dyson; 本名 Henry Victor Dyson, 1896-1975)との対話により変化する。トールキンは「キリストの物語は『真実の神話』である」「他の神話と同様に我々に働きかけるが、ただ一つ違うのは、それが本当に起こったことなのだ<sup>(12)</sup>」と述べた。この主張は間もなくルイスに受け入れられ、ルイスもキリストを「真実の神話」と表現するようになった<sup>(13)</sup>。

そこで本稿では、ルイスがキリストの生涯を「真実の神話」としたことに着目し、ルイスのエッセイから彼のいう「神話」について検討したい。

本稿では、特記のない限り「神話」はキリストの生涯の物語に限定して用いる。他方、この『神話』を含め、人間の手によって創作・伝承されるギリシア神話や北欧神話といった神々の物語を総称して「神話群」と呼ぶ。この「神話群と神話」を基底に、これらがルイスによってどう理解され、どう説明されているのかを見ていきたい。

まず第1節では、ルイスのエッセイ「神話は事実になった」で、神話群の重要性がどう主張されているかを概観する。続いて第2節では、第1節で概観した考えのもとでキリスト教における「神話」をどう見なししているのかを確認する。そして第3節では、ルイスが自らの作品で「神話」をどのように表現したかを検討する。ルイスが執筆した作品そのものをも「神話」とすることについても言及することになるだろう。

## 1. 「神話は事実になった」——神話群の機能

ルイスは 32 歳の時、グリーヴスに「キリストの物語は本物の神話である。他の神話と同じように私たちに働きかけてくる。しかしその大きな違いは、これが現実起きたことであるということである。[—略—] 神がより適切な言葉で既に表わしている実際の受肉、十字架、そして復活ということ、我々の概念と認識に翻訳したものである<sup>(14)</sup>」と書き残している。

ルイスがトールキンに倣ってキリストの物語を「真実の神話」としたのは、神が我々のために史実を翻訳したものと見なしたからである。ルイスが「神話」について詳細に述べているものがエッセイ「神話は事実になった」である。このエッセイは神話群の有効性について述べつつ、キリストの物語だけを事実としていることが述べられている。本節ではこのエッセイの前半をまず取り上げ、あらゆる神話群の機能や価値について考察したい。

このエッセイの特徴の一つは、軽視されがちな数々の神話群がいかに重要で、どういった効力を持つのかを示していることであろう。ルイスはまず神話群そのものの価値を主張する。「神話に価値がない」との考えに反論し、「残るものは神話 (the myth) と呼ばれるもので、去り行くものは現代の生きた思想と呼ばれるものである<sup>(15)</sup>」と述べている。そしてその重要性をこう書いている。

我々が唯一経験できる現実、この痛み、この楽しみ、この犬、この人間といった具体的なものである。人を愛している時、痛みに耐えている時、楽しみを味わっている時に、知性的に楽しみや痛みや人格とは何かを把握などしない。<sup>(16)</sup>

換言すれば、痛んでいない時こそ痛みとは何か考えることができ、楽しみの中になく時にこそ楽しみとは何かを把握しえるということである。つまり物事について考えるためにはそこから一旦離れ、客観的に見ること

が重要であるとしているのである。

これについて R. ジョンストンは、神話群が果たす役割を「現実を理解するためのもの<sup>(17)</sup>」とルイスが見ていると判断している。ジョンストンの説明によれば、「神話を立証する唯一のことは、その人がすでに知っていたことよりもさらに大なる現実を見るという想像的な経験ができたかということ<sup>(18)</sup>」である。つまり物事を客観的に見る時に、読むことによってそれに関しての何らかの新しい発見を提供してくれるものが神話群なのである。ルイスはさらにこうも述べる。

偉大な神話を楽しんでいる時、我々は、それ以外の方法では、抽象的にしか理解できないものを具体的に体験できる。<sup>(19)</sup>

すなわち物事を一旦置いて神話群を読むことで「抽象的にしか理解できないもの」、ルイスによれば「普遍的な原理」や「真理」といったものを知ることができる。<sup>(20)</sup>

これについて S. メトカフは『聖書の読み方』の中でルイスに同意して「神話と出会うなら、音楽、詩、夢、想像、幻、記憶、死、復活といった真実を味わうことができる<sup>(21)</sup>」と述べている。「真実を味わう」とは、ルイスの以下の表現を見ると分かりやすいだろう。

神話は物語として受け取っている時だけ、その原理を具体的に経験することができるのである。いいかえれば抽象——というよりはむしろ何十もの抽象——を得る。神話からあなた方に流れ込むものは真実 (truth) ではなく現実 (reality) である (真実とは常に何かに関するもので、現実とは真実が関しているものである)。それゆえ、あらゆる神話は抽象の次元 (abstract level) で無数の真実の父となる。神話は山であり、この山から流れ出る多様な流れはこの抽象の谷間で真実となるのである。さもなくば、神話は地峡で、半島のような思考の世界を我々が現実<sup>(22)</sup>に属する大陸と結びつけるものである。

神話群から我々に入ってくるものはまず現実である。そこで我々は痛みや楽しみなどを味わうことができる。つまり神話群を読むことで、現実の含まれる読書体験をし、そこに描かれるものから諸真実を把握できるのである。そして神話群を自分ものとして読んだ時に、そこに秘められたものを具体的に経験することができる。というのは、神話群から得られるものは、まずリアルな物語であり現実である。そしてそこから真実が入り込んでくるのである。すなわち神話群は、我々の現実を示しながら、我々が関わる真実の源といえるだろう。

これについて B. ヤングはルイスに同意し、「我々は『真実』を何か抽象的で普遍的なものとして通常は考える。そして痛みや喜びを感じるのと全く同じようには真実を経験することはできない」とした上で、真実を経験できないというジレンマを「部分的に解決してくれるものが神話<sup>(23)</sup>である」と述べている。

このようにルイスは神話群の価値を認めた。それは現実から真実を知ることができるという神話群の持つ限りない可能性に重点を置いているためである。「神話は事実になった」の第一の特徴は、普遍的なもの、真実を理解できるものとして神話群を評価していることである。

## 2. キリストの物語のみが事実

「神話は事実になった」の後半では二点目の特徴が見えてくる。それはルイスがキリストの生涯を「神話」としつつ、あらゆる神話群の中で、キリストの物語のみを唯一の事実としていることである。エッセイの後半にはこう書かれてある。

神話が思想を超えるように、受肉は神話を超えている。キリスト教の中心は事実 (fact) でもある神話である。死にゆく神の古い神話が、神話であり続けつつ、伝説と想像力という天から歴史という地上に降りてきた。特別の日、特別の場所で、はっきりとした歴史的結果を伴って起こったのである。バルドルやオシリスのような、いつど

こで死んだかわからない神から、ポシテオ・ピラトのもとで(全て道理にかなって)十字架にかけられた歴史上を生きた位格(persona)へと移っている<sup>(24)</sup>。

ルイスはここでキリストと他の神々とを明確に分けており、その区別となるのが事実かどうかということである。これについてはルイスの『奇跡論』にも記述されている。そこには死んだ植物の種が地に落ち再び生命が宿るといふ、死と再生のパターンが自然界に見られることが書かれている。「ではキリストは、アドニスなど他の神々と同じではないか」という問いに対して、キリストがそれらに似ているのは、「彼らがキリストの肖像(a portrait)だからである<sup>(25)</sup>」と答えている。神を源にして全ての神話群が生まれてきたとしているのである。これについてルイスは『詩篇を考える(Reflections on the Psalms)』(1958)でもこう述べている。

キリストの神話がバルドルの神話に似ているのは、同じ起源だからである。[—略—]神話とキリスト教真理との類似が偶然でないのは、太陽と池に映る太陽の姿との類似、あるいは史実とそれに何かしら手が入り民間に伝わるものとの、あるいは現実世界の木々や丘と夢に出てくる木々や丘との類似に他ならない<sup>(26)</sup>。

その上でこれまでのいくつもの神話の「語る人の何人かあるいはそのうちの一人が神に導かれていたと私は信じないわけにはいかなくなる<sup>(27)</sup>」としている。

ルイスがキリストの物語を神話群の源と判断する理由の一つは、キャンベルらと異なり、時系列的にキリストと神話群の関係を捉えていないことである。聖書の物語が過去の神話と一致しているのを見た時に過去の神話をその源とするのではなく、神が先に存在し、たとえ年代的に聖書よりも先に成立した神話群でさえも、ルイスは聖書も神話群も全て神から発生したものとしているのである。

そしてルイスは「神話は事実になった」の最後をこう締めくくっている。

事実となったものは神話であり、事実の世界に神話の特徴を全て備えてきた。キリストはバルドル以上でそれ以下ではない。我々は神学に神話的な輝きがあることを恥じてはならない。[—略—]もし神が神話を創作することを選んだのなら、—天そのものが神話である—我々が神話に共感するのを拒むだろうか。これは天と地の結婚であり、完全な神話と完全な事実との結婚である。<sup>(28)</sup>

ルイスはキリストと他の神話群との類似を認めつつも、キリストを他の神話群に貶めることはなく、キリストの物語のみが事実であると強調している。さらにいえることは、ルイスがここで語っているキリストの死と復活は、現代の我々にも関わることであるといえよう。例えば、他の神話の神々が死んでよみがえったという物語は人間に何か、愛や勇気といった、普遍的なものや抽象的なものを提示してくれるかもしれない。だが、そこまでである。それに対してキリストの死と復活だけが、人を贖うという役割を持っているのである。つまり「真実の神話」は事実であることに加え、現代の我々にも生きて働く「神話」であるといえよう。

そうすると、これはルイスによる非神話化への反論なのかという疑念が生じる。確かにこれまでのルイスの文学研究においては、ルイスを擁護する形で議論が展開されてきた。マクグラスはブルトマンの主張に対して、「福音書は神話から切り離されるものなのか」「抽象的で普遍的なメッセージはそこから引き出されうるのか」と、以下のように疑問を呈している。

ルイスにとってキリスト教は「真実の神話」として、最もよく理解される。「非神話化する」ことは、キリスト教と、想像力を実感することとの繋がりを壊してしまう[—略—]。ルイスにとって求められていることは、再神話化を通して神学的主題を置き換えることで



ある。そこではキリスト教信仰の創造的、詩的、そして知的広がりを効果的に示すために神話が用いられるのである<sup>(29)</sup>。

マクグラスはこう述べ、ルイスと異なりブルトマンは福音書と「神話」を切り離そうとしたと理解している。しかしブルトマンは次のようにも述べている。

神話的概念の背後にあるより深い意味を取りもどそうとするこの新約聖書の解釈の方法を、私は——不満足な語ではあるが——非神話化と呼ぶ。その目標は、神話的な陳述を除去することではなく、それを解釈することにある。それは解釈学の一方法である<sup>(30)</sup>。

ここでブルトマンがいう非神話化が、解釈学の一方法であるならば、聖書の深層の意味を探っていくという読みの一つの方法にすぎないのではないか。一つの解釈方法に名付けられたものであり、「神話」そのものを否定していたわけではないのではないか。ブルトマンは「神話」を過去のもので現代には意味を為さないものと捉えていたのか、あるいは「神話」に何か価値を見出すことができると考えていたのか、疑問は残る。だが、それはブルトマンの「神話論」へとそれてしまうためにここに留めるが、ブルトマンとルイスとの間に関心の対象や聖書の読み方などの相違が生じていると考えられる。そのためブルトマンとルイスは対立しているというよりもむしろ、それぞれ聖書へのアプローチが異なるのみであらうと思われる。

ここまで「神話は事実になった」における二つの特徴を見てきた。一つは神話群を価値あるものとしていることであつた。これは神話群を読むことで普遍的なものを見出すことができるというものであつた。もう一つはキリストの生涯をいったん「神話」としながらも、キリストの物語だけが事実であると主張している点であつた。

ジョンストンは、ルイスがこの考えのもとに「神話」といわれる『ナ

ルニア国年代記』を創作したと述べている<sup>(31)</sup>。このエッセイの後にルイスは『ナルニア国年代記』を出版している。では「真実の神話」とした物語をルイスは作品でどう著わしたのか。次節ではルイスの著作を取り上げ、ルイスが「神話」としてキリストの物語をどう描出しているのかを見てみたい。

### 3. ルイスの書いた神話

#### — 「神話」としてキリスト教を見る重要性

前節までルイスがキリストを「真実の神話」として、「キリスト教」や「物語」が「神話」であり、同時に事実であると述べていることを見てきた。本節ではルイスのいうキリスト教と「神話」との関連において、他の作品を見ながらルイスの「神話」のとらえ方を検討していきたい。

ルイスの創作した「神話」としてよく知られているものが『ナルニア国年代記』であろう。『ライオンと魔女』では身代わりの死と復活が描かれている。

アスランが平たい石の上で縛り上げられてしまうと（縛られているあまりに紐の束のようでした）、水をうったような静けさが群衆に行きわたりました。四人の鬼婆が四つのたいまつをかかげて、石板の四隅に立ちました。魔女が前の晩と同じように両腕をむき出しにし、あの時のエドマンドの代わりが今はアスランでした。それから魔女はナイフを研ぎ始めました。そのナイフはたいまつ of 光を受けて、はがねでなく石でできていること、不思議でぞっとする形をしていることが、子供たちに見てとれました。

とうとう魔女が近づきました。魔女はアスランの頭のそばに立ちました。魔女の顔は心の激しい動きのせいで、ゆがみ、ひきつっていましたが、アスランの顔は、ただじっと空を見上げ、怒りも恐れもなく、少し悲しそうでした。魔女はナイフをふりおろす前に、かがみこんで、震える声でこう言いました。

「さて勝ったのは誰だ？ 愚か者、こんなことで裏切り者の人間が救えると思ったのか？ では約束通り、あの子のかわりに、お前を殺してやろう<sup>(32)</sup>」。

このように、アスランが犠牲となって殺される場面が描かれている。続いてアスランのよみがえる場面を見ると次のようになっている。

石舞台の石板が端から端まで二つに割れていたのです。[—略—] 朝日に輝いて、前に会った時よりもはるかに大きく、たてがみをゆすりながら(たてがみが元通りに生えていました)、アスランその人が立っていました。[—略—]

「魔女は確かに、古い魔法を知っていたが、彼女の知らないもっと古い魔法のおきてがあったのだ。魔女の知るのは、ただこの世のはじまりのものだけだった。[—略—]何の裏切りもおかさない者が自ら犠牲となり、裏切り者の身代わりとして殺された時、おきての石板はくだけ、死はふりだしにもどってしまうという、古い定めをあ<sup>(33)</sup>の魔女は知らなかった」。

この場面はキリストの十字架の死と復活をもとにして書かれたというものが先行研究での一致した見解である<sup>(34)</sup>。この場面には二つの点を見ることができる。まず、身代わりの死とはどういうことかを現実を以て示されているのを見ることができる。そして、死んで復活する物語は、神話群をなぞらえながらも、現実と共に贖罪という真実をも提示している。神話形式だからこその場面を味わい、キリスト教の中で語られる多くのことを具体的に見るとい<sup>(35)</sup>う読書体験をすることができる。

また、ルイスはナルニアが創造される場面を描いている。

次の瞬間、闇の他は何もなかったところに、何千という光の点がぱっと輝き出ました [—略—]。

東の空は白からあかね色へ、あかね色から金色へ変わっていきました。あの声はますます高くなり、そのために空気が震えるほどでした。そしてその声が、まだそれまでに出したことのないほど力強い、荘厳な響きにまで高まったちょうどその時、太陽が昇りました。

〔—略—〕そしてその光の東が地上に差した時、旅人たちは自分たちが来た場所の様子を初めて見ることができました。そこは谷間で、広く流れの早いひとすじの川が、その間を通して、うねりながら、東の方、朝日の方に向かって流れています。南には山々があり、北の方にはそれより低い山々が連なっていました。しかしこの谷間を見ても、土と岩と水ばかりで、一本の木も茂みも、草の葉さえも見られません。

〔—略—〕100メートルばかりはなれた山の背に、黒々としたモミの木が連なって現われ出たとき、ポリーはそれが一瞬前にライオンが歌った、長くひっぱるような深い調べと関係があるのだと思いました。それからライオンが突然早いリズムの軽やかな調べを歌い出した時、ポリーはサクソウがあちこちに突然咲き出したのを見ても驚きませんでした。こうして、口もきけないほどの感動のうちに、ポリーはこれらの全てのものが（ポリーの言葉を借りれば）「ライオンの頭から出てきた」ことを確信する<sup>(35)</sup>のでした。

ここで「頭から出てきた」とあるが、ルイスは『キリスト教の精髓 (Mere Christianity)』(1952)で「キリスト教では神が世界を創ったと考えます。時間も空間も、暑さも寒さも、色も香りも、全ての動物と植物も、神がその『頭の中から作り出した』もので、人間が物語を作り出すのと同じです<sup>(36)</sup>」と書いている。この場面から、以下のことが見える。まずナルニアの初めは創世記をなぞらえたものであるとされている<sup>(37)</sup>。そう読むならば、この世の始まりは偶然ではなく神の意志によって創られたということである。

ルイスの創作した神話群は「真実の神話」を源とし、抽象的なものを

具体的に提示しているといえよう。そして、このルイスの神話群を読んだ後に改めてキリストの物語を見ると、それまで理解できなかったものを具体的に味わうことができたなら、それはルイスの新しい「神話」である。神話形式は理解の助けになるということをルイスは自らの作品によって示した。キリストの生涯は物語のようだが事実とみたルイスは、それを「真実の神話」とし、再神話化した。そして「真実の神話」を示す新たなキリストの物語を書く作り手、神話創作者となったのである。

#### 4. おわりに

本稿では、聖書が他の神話群と同じレベルに見られることがあるとした上で、ルイスはキリストを唯一の「真実の神話」としたことを瞥見した。そしてエッセイ「神話は事実になった」において彼は神話群の機能をどのようなものであると考えているか、また、キリストの物語を神話群の中で唯一の事実と判断していることを見てきた。さらに『ナルニア国年代記』から、「神話」として描出されたキリストの物語ならびに創世記を概観した。ルイスの創作した物語によって、それらがより理解しやすくなることを確認した。

以上の考察から、以下のことがいえる。「神話」とは、ルイスの述べる通り、現実を示し真理を提示してくれるもので、軽視したり排除したりせずとも有効な読み方ができると考えられる。そして「神話」であるからこそ、福音書は深く理解されうるといえる。

冒頭でトールキンの対話について触れたが、トールキンはエッセイ「フェアリー・ストーリーについて (On Fairy Stories)」(1938-1939)で、物語を書くという人間の行為を「準創造 (sub-creative)」的なものであるとしている。それは、最初に人間が神の姿に似せて創られた、という創世記に基づく。この世界を創造した神の行為に倣い、人間もそれに準じる行為を行なうことができる。その準じる行為というのは、人間の執筆行為の中で、別世界を創り、登場人物を創り、その人間に言葉を吹き込むことである。トールキンはこれを準創造と呼ぶと同時に、執筆する者

を準創造者 (sub-creator) と呼んでいる。準創造が成立する理由として、「それは我々自身が創られたものだからである。そして創られたばかりでなく、創造者の姿に似せて創られているから、なのである<sup>(38)</sup>」としている。

ルイスもこのトールキンのエッセイを高く評価していた。そして『マルコムへの手紙 (Letters to Malcolm)』(1964) で、執筆することに関して「たとえ人間の作品であっても、作り手が『それを一切自分自身の頭から得た』時には創造の業に最も接近する<sup>(39)</sup>」と述べてこう続けている。

究極的な意味においては、私たち〔人間〕は—詩人であれ、音楽家であれ、発明家であれ—決して作ることはない。私たちは組み立てるにすぎない<sup>(40)</sup>。

ルイスは神話創作者であったが、人の作品はまた神の創造に倣ったという点で、準創造者としてよいだろう。それは、全ての源は神であるとし、神話群に価値を見出したルイスの書くことができた唯一の「神話」なのである。

ルイスは神話群に価値を見出し、「真実の神話」をもとに、自らの神話群の一部を創り出した。それは神話創作者というだけでなく、神のもとで創作した準創造者といえよう。だが課題も残る。神話形式以外でルイスが執筆したのも神話体系に属するものとして解釈するべきであろうか。これについては別稿を構えたい。

## 注

- (1) 本論文は、日本基督教学会関東支部会(2016年3月18日)において筆者が行った研究発表、「真実の神話としてのキリスト教—C. S. ルイス『神話は事実になった』から」を修正・加筆したものである。
- (2) 「スター・ウォーズ最新作公開」『東京新聞』2015年12月20日朝刊、17面。
- (3) 「ルーカスはキャンベルの研究成果にヒントを得て『スター・ウォーズ』シリーズを制作した」と訳者解説にある。キャンベル、ジョーゼフ、ビル・モイヤース『神話の力』(飛田茂雄訳)早川書房、2012年[Campbell, Joseph, and Bill Moyers, *The Power of Myth*, New York: Anchor Books, 1991]、490頁。
- (4) 同書、23頁。
- (5) 同書、54-55、98-99頁。キャンベルはキリストの物語と似た物語が他の宗教や民族にもすでに存在していたことを強調し、聖書でなく、「一体化するための新しい神話が必要」と述べている。またトム・ハーバーも『キリスト神話—偶像はいかにして作られたか』において、キリスト以前に様々な神話群が存在していたことと過去の神話と聖書との類似点を提示した上で、聖書の記述は全て「象徴的要素から成り立って」おり、聖書物語は作り話であるとして、そこからいかに教訓を得るべきかに重点を置いていると思われる(ハーバー、トム『キリスト神話—偶像はいかにして作られたか』(島田裕巳訳)バジリコ、2007年、275頁)。
- (6) R. ブルトマン『新約聖書と神話論』(山岡喜久男訳)新教出版社、1980年、27頁。
- (7) McGrath, Alister E., *The Intellectual World of C. S. Lewis*, Chichester: Willey & Sons, 2014, pp. 69-72.
- (8) Brazier, P. H., *C. S. Lewis: Revelation, Conversion, and Apologetics*, Eugene: Pickwick, 2012, pp. 195-196, 264.
- (9) 本多峰子『天国と真理』新教出版社、1995年、70頁。
- (10) A. グリーヴスはルイスが少年期から亡くなる年まで書簡をやり取りした親友で、彼への書簡は1914年から1963年までのものがまとめられている。引用は1916年10月12日のもの(Lewis, C. S., *They Stand Together*:

- The Letters of C. S. Lewis to Arthur Greeves (1914–1963)*, London: Collins, 1979, p. 135)。
- (11) 1931年9月19日、ルイスが二人をカレッジのディナーに招いた席で議論がはじまった (Wilson, A. N., *C. S. Lewis: A Biography*, London: Collins, 1990, pp. 124–127; Carpenter, Humphrey, *The Inklings: C. S. Lewis, J. R. R. Tolkien, Charles Williams and Other Friends*, London: George Allen & Unwin, 2006, pp. 42–46)。
- (12) Wilson, *op. cit.*, p. 126.
- (13) この時のことをブレイザーは、二人のキリスト者の信念と生き方にルイスは感銘を受け、彼らに参入すべきとの必要を感じた、という見解を示している (Brazier, *op. cit.*, p. 46)。
- (14) Lewis, *They Stand Together*, pp. 427–428. 1931年9月28日の書簡。
- (15) Lewis, C. S., “Myth Became Fact,” *Essay Collection: Faith, Christianity and the Church*, ed. Lesley Walmsley, London: HarperCollins, 2000, pp. 139–140.
- (16) *Ibid.*, p. 140.
- (17) Johnston, Robert, K., “Image and Content: The Tension in C. S. Lewis’ *Chronicles of Narnia*,” *Journal of the Evangelical Theological Society* 20/3 (1977), pp. 253–264: p. 259.
- (18) *Ibid.*, p. 258.
- (19) Lewis, “Myth Became Fact,” p. 141.
- (20) *Ibid.*
- (21) Medcalf, Stephen, “The Coincidence of Myth and Fact,” ed. M. Wadsworth, *Ways of Reading the Bible*, Sussex: Harvester, 1981, pp. 55–78: p. 57.
- (22) Lewis, “Myth Became Fact,” p. 141.
- (23) Young, Bruce W., “Lewis on the Gospels as True Myth,” *Inklings Forever*, Vol. 4, Upland: Taylor University, 2004, p. 4.
- (24) Lewis, “Myth Became Fact,” p. 142.
- (25) Lewis, C. S., *Miracles in Selected Books*, London: HarperCollins, 1999, p. 1188.
- (26) Lewis, C. S., *Reflections on the Psalms in Selected Books*, London: HarperCollins, 1999, pp. 700–701.



- (27) *Ibid.*, p. 704.
- (28) Lewis, “Myth Became Fact” p. 142.
- (29) McGrath, Alister, “A Gleam of Divine Truth: The Concept of Myth in Lewis’s Thought,” *The Intellectual World of C. S. Lewis*, Chichester: Wiley-Blackwell, 2013, pp. 70–71.
- (30) Bultmann, Rudolf, *Jesus Christ and Mythology*, New York: Charles Scribner’s Sons, 1958, p. 18 (私訳、ブルトマン『キリストと神話』(山岡喜久男、小黒薫訳) 新教出版社、1972年、17–18頁参照)。
- (31) Johnston, *op. cit.*, p. 262.
- (32) Lewis, C. S., *The Lion, the Witch and the Wardrobe*, London: HarperCollins, 1998, pp. 161–163.
- (33) Lewis, *The Lion, the Witch and the Wardrobe*, pp. 169–171.
- (34) Hooper, Walter, *Past Watchful Dragons*, London: Macmillan, 1979, p. 110; Schakel, Peter, J., *Reading with the Heart*, Grand Rapids: Eerdmans, 1979, p. 28; ---, *The Way into Narnia*, Grand Rapids: Eerdmans, 2005, p. 45.
- (35) Lewis, C. S., *The Magician’s Nephew*, London: HarperCollins, 1998, pp. 115, 117–118, 123.
- (36) Lewis, C. S., *Mere Christianity in Selected Books*, London: HarperCollins, 1999, p. 344.
- (37) Colbert, David, *The Magical World of Narnia*, London: Puffin Books, 2005, p. 81; Schakel, *op. cit.*, p. 106.
- (38) Tolkien, J. R. R., “On Fairy Stories,” *Tree and Leaf*, London: Unwin Books, 1970, p. 50. これにマクグラスも同意し、「人間は神の似姿として創られた。だからストーリーを創作する能力も人間の中に神の合理性として存在する」と述べている (McGrath, *op. cit.*, p. 59)。
- (39) Lewis, C. S., *Letters to Malcolm: Prayer in Selected Books*, London: HarperCollins, 1999, p. 604.
- (40) *Ibid.*, p. 604.

(立教大学大学院キリスト教学研究科博士課程後期課程在学 おかだ・りか)

